

ラ・ブリュイエールの常識と批評精神

松尾正路

「レ・キャラクター」の序文

ラ・ブリュイエールの「レ・キャラクター」を批評の書として考えるならば、この著者の批評精神は何を回転の軸として動いているか、それを捜し当てようとするのが、この小論の目的である。ラ・ブリュイエールは序文のなかで二つの書物について次のように語っている。

「ある書物は、形而上学を宗教のために利用するのが著者の意図であり、人間精神の実体、その情念や墮落を教え、また同時に、その高貴厳肅なモチーフをとらえて、人々を徳に導き、キリスト教に改宗させようとする。また他の書物は、繊細な心と洞察力を持つ一人の人間が、世の人との交りから得た教訓、つまり、自己愛というものがすべて人間の弱さの原因であるという思想を基にして書き表したもので、いたるところ、人間を見つけ次第、人間攻撃の矛をおさめようとはしない。しかし、この独自の思想は、用語の選択と表現の変化によって、滋味深く新鮮な魅力となっている。」

ラ・ブリュイエールがここに暗示する二つの書物は、パスカルの「パンセ」と、ラ・ロシュユフォオの「省察録」であろう。そして、自分の作品について、

「わたしの作品は、これら二つの作品とはまったく異っている。第一の作品のように崇高なものではなく、第二の作品のようにデリケートなものでもない。わたしの作品は、人々が理をわきまえた人間になるためのものである。簡

単で、だれにも通じる筋道をたどり、これという方法を立てることもせず、年令、男女の別、生活条件、そして、人間性につながるさまざまな汚点や弱点や滑稽なものなど、それぞれの項目にしたがって随意気ままに人間探究を試みるというやり方である。」と語っている。

パスカルやラ・ロシュ・フコオの場合に比較して、自分の作品は「人々が理をわきまえた人間になるため」「簡単でだれにも通じる筋道をたどる」というラ・ブリュイエールの言葉は、常道を外れた人間に常識の尺度を与えようという意味にとれる。常識の立場は、崇高偉大な精神のモチーフに訴えたり、繊細鋭利な分析にだけ頼る必要を認めない、という宣言のようにも見える。常識的でさえあることのできない人間の姿を常識の尺度で描き、判断するというのが狙いのである。そのために「これという方法を立てることもせず」むしろそれが人間の実体を示す最良の方法であると示唆している。人間とは、われわれの周辺に生活している人間百態のことであって、それ以上のものではなく、それ以下のものでもなく、このような人間の真実を覚え書きして証明するのが、わたしの批評であり、わたしの文体である、と、この作者は考えているようである。

また、パスカルやラ・ロシュ・フコオは、この作者の師テオフラスト以上に深く人心の内部に立ち入り、その欠陥や襲の間に鋭く食い込んでいった。人間の外側として現われる行動、言語、物腰など、無数の兆候を通して、その根底が何であるかを教え、人間失墜の根源にまで逆上ろうとしたが、ラ・ブリュイエールの「レ・キャラクター」は、著者自身の言葉によれば、「これとはまったく反対」なものである。「まず、人間の思考、感情、動きなどを展開しながら、そこに人間の悪意や弱点の原則 (*le principe*) を発見する。そこで読者は、人間は何を為し、何を言うものかを容易に予見し、この世間に充満する汚辱軽薄の行為にも驚くことがないであろう。」

この説明は、ラ・ブリュイエールの常識の論理に符合している。人間存在の根本義に逆上って神の光明に頼れば、

罪業の深淵と救済の無限の困難が現われるだけである。心理の巖に深入りすれば、信ずる美德のすべてが崩壊する。神にせよ、自己愛にせよ、人間の行為全般を律する一つの究極的な原理は、個人を全体に抱括する便利なシステムであるが、個人の生の固有な真実とは別なものである。しかるに、ラ・ブリュイエールもまた原則 (Le Principe) という言葉を使っている。これはどういう意味だろうか。

ジュリアン・バンダは、プレイアド版の註釈文の中で、これをラ・ブリュイエールの矛盾として指摘している。方法を立てないことを宣言しながら、ラ・ブリュイエールもまた「原則」を設定しているというのである。

「われわれは、この言葉のなかに、ラ・ブリュイエールがデカルト流の影響から逃れ、モラリストとしての印象主義を築こうとする明かな意図を汲みとることができる。それはスタンダールに至って初めて開花するものであるが、このような宣言は、すぐその先で矛盾した言葉にぶつかる」。即ち「原則」である。実際に書かれた作品は、それぞれの項目にしたがって方法も立てず書かれているにもかかわらず「科学精神とはまったく対立的な気質を持つラ・ブリュイエールが、あえてこのように科学精神の高揚を見せびらかしているのは興味深い。またラ・ブリュイエールは自分の作品が一つの目的のために構成され、秩序立ったものと思われるように努めている。われわれはここにボワロアの詩を思い出す。——人はまことなる自己の性を知ること稀なり——。ラ・ブリュイエールはまことなる自己を知ってはいたが、その自己ではないところのラ・ブリュイエールとして通りたかったのである。」

ジュリアン・バンダによれば、「原則」はラ・ブリュイエールの矛盾であるばかりでなく、思わせぶりだったのである。しかし、文体の評価を明快と正確さにおくラ・ブリュイエールが、短い章節のなかでこのような矛盾を犯し、さらにそれが思わせぶりであるというのは信じがたい。「原則」は、パスカルの神やラ・ロシュフコオの自己愛のよう人間一切の上にある超越的な意志、または第一原因として考えられるものではなく、個別的なものから一般的な

ものへ通ずる真実というだけの意味ではなからうか。それも、ラ・ロシュフコオの自己愛のように、行為のすべてを貫く唯一の原理ではなく、さまざまな真実の原理として解釈すれば、ラ・ブリュイエールの論理に矛盾はない。彼の作品の形式や内容にも一致している。ある特定人物の素描や、評価や、文学論も、このような真実を語る豊かな表現手段として考えられる。そしてこのような真実は科学の方法や法則を予定するものではない。

さらに、「レ・キャラクター」の目的は「人々が理をわきまえた (raisonable) 人間になるためのもの」と、作者自身が表明しているばかりでなく、テオフラストの作品についても、「この作品はただ人間の心の生態を教え語るもので (instruction)、人々が学者になるよりも、賢明 (sage) な人間になることを狙いとしている」といっている。これはラ・ブリュイエールが自己の立場を語るための代弁であろう。このように書物の社会的、実効的な効用を目的として宣言するのは、たしかに、精神の独立と無償性に反してはいるが、文学や批評の機能がまだ十分に社会から独立していなかった当時においては、むしろ自然であったと思う。のみならず、作者と読者の関係からいえば、読者が作者の認識の仕方を承認することが instruction である。作者がそれを目的とするか、ひそかに期待するか、無関心であるかは、時代の風習や作者の気質にかかわることである。

ラ・ブリュイエールの「レ・キャラクター」が批評の書であるのは、このような認識の仕方として多くの真実が語られているからである。では、その批評の回転軸は何であったか。

「作品について」

1

一すべてすでに言いつくされた。七千年以上も昔、人間が、考える人間がいた。われわれはあまり遅く生れすぎた。

人間の性情に関するもつとも美しい、もつともすぐれた言葉は摘み取られてしまった。われわれは古代人や近代の練達者の後から落穂を拾って歩くだけである。」

作品の冒頭にこの章句をかかげた作者の意図は文字通りの意味に限定しきれないものがある。すべてが言いつくされた後で、作者はあえて何を言おうとするのか。作者が最初から自分の作品を無用なものとして宣告するのは自家撞著である。しかし、落穂拾いこそ作者の自負の拠りどころであって、そこに比重を加えると、この章句の表面上の意味が変わってくる。たとえばすべてが言いつくされたとしても、落穂はいつも残っている、という意味に変わる。そして、その落穂を拾うことさえ、けっしてだれにもできる容易な業ではないとすれば、ラ・ブリュイエールの「レ・キャラクターール」は十分な存在理由を持つことになる。事実、この作者の拾い上げた落穂によって文学と批評の新しい世紀の幕の一端が開かれるのであるが、ラ・ブリュイエールはそれを謙譲な調子で、しかし、すべてを決する短刀の最初の一突きのように、次の章句で始めている。

2

「正しく考え、正しく話すように努めることだけが必要である。他人をわれわれの趣味や感情に引き寄せようとするのは、過ぎたる願いである。」

この章句は作品全体を貫く作者の批評精神の基礎となり、作者の文体を決定する重要な合図のように思われる。まず、「正しく」という言葉は *juste* であって、*correct* ではない。正確というよりも的確の意味に近い。正確 (*correct*) は基準に従う正しさであるが、的確 (*juste*) は、的を狙い当てる正しさである。受け入れる正しさではなく、自分の精神がおこなう判断の正しさである。これは容易な業ではないから、ただ的を狙い打ちだけに専念すべきであって、「他人をわれわれの趣味や感情に引き寄せようとするのは」的の外に目をそらすことだ、という意味であろう。自分

の文体で他人を強いるな、という文体の警戒不信の意味にも受けとられる。それはスタンダールを経て現代文学にまで通じるものであるが、作者の意図はそれほど遠くまで行っていないだろう。いずれにせよ、この章句全体の印象として、文学のなかの余分なものをできる限り排除しようとしていることは確かである。ラ・ブリュイエールの近代性は、ジュリアン・バンダの言う「モラリストの印象主義」よりも、むしろこの点にあるのではないか。

3

「書物を書くのは、時計職人が時計をつくるように、一つの職業 (métier) である。作者であるためには 에스プリ 以上のものが必要である。ある司法官がその功績によって最高の頭職についた。彼は職務の遂行に実務的な敏腕家であった。ところで、この人物がある作品を出版した。それが珍無類のものだった。」

エスプリ (esprit) を精神と訳すことはできない。精神以上のもの、では意味を成さない。エスプリを、精神的確かな判断活動とすれば、そのような多少のエスプリを持っているくらいでは書物は書けないという意味になる。この場合の書物は、人間の性情や精神世界にかかわる作品のことであって、広義の文学書と解釈することもできるだろう。的に当たった正しい言葉や表現を見つけ、さらにそれを文学作品として産み出すのは、文学を事とする者の間においてさえ、極めて困難な才能の修練である。しかもその才能は、単なるエスプリではなく、さまざまな人間的資質を必要とする判断の行為であってみれば、優秀な司法官のエスプリが、珍無類の作品を書いたとしても驚くには当たらない。めったに文学の落穂は拾えないのである。

9

「今日まで、数人の手にかかる一つの傑作品というものは、ほとんどない。ホーマーは「イリアド」ヴァージルは「エネイド」ティトリヴは「デカード」キケロは「演説」を、それぞれ残している。」

ジュリアン・バンダは、この章句に照応するデカルトの「方法論序説」第二部の章句を註にあげている。

“Souvent il n’y a pas tant de perfection dans les ouvrages composés de plusieurs pièces, et faits de la main de divers maîtres, qu’en ceux auxquels un seul a travaillé.”

「ラ・ブリュイエールがデカルト流の影響から逃れ、モラリストの印象主義を築こうとする明かな意図」と言っているジュリアン・バンダが、まったく符合したラ・ブリュイエールとデカルトの章句を照して合せている目的は何であるか不明である。デカルトのこの章句は、ドイツの冬のあの有名な孤室 (poète) の瞑想から生れたもので、先入観念を払式して純粹理性に立脚するという解説の前提となるものだが、デカルトの純粹理性とラ・ブリュイエールの「正しく考える」こと、そして両者の言う「個人の作品」の意味の相違は、哲学と文学の相違を考えることで充分であろうと思う。デカルトは先人の影を排除して理性の白光を求め、ラ・ブリュイエールは先人に従いつつ自己を立て、その落穂を拾うのである。

11

「人々の間に見かけるものは、趣味性 (goût) よりも、むしろ多く敏捷活発な論議の精神である。あるいは、安定した趣味、適切な批評を身につけた精神の持主は極めて稀である、と言ったほうがよいだろう。」

ラ・ブリュイエールの場合、正しく考えることも、話すことも、抽象的な論理の普遍性を意味するものではないことがわかる。

14

「作家の全精神は、よく定義し、よく描くことにある。モイゼ、ホーマー、プラトン、ヴァージル、ホラスなどが他の作家の上に抜き出ているのは、彼らの表現や描写によるものである。自然に、強く、デリケートに書くためには

「真実を書き現わさなければならぬ。」

これは2の章句をさらに具体的に裏づけしたものであろう。正しく考えることは、よく定義することであり、的を射当てることである。誇大な形容詞で自己の趣味や感情を盛り立て、描写の対象を紛飾するのは、的から外れるのに役立つだけである。しかも真実を自然に語ることは、真実を裸に語ることはない。また、強く語ることはその声の大きさと語ることではなく、デリケートなものに通じる強さでなければならぬ。真実は裸ではない。装飾されたものでもない。真実の的を射るのは、このような真実を狙うことである。文学とはこのことに他ならない、と、ラ・ブリュイエールは言っているようである。次の14の章句の中の一節が、さらにこの作者の文学上の拠点を明かにしている。

14

「人々が学問、芸術において、古代人の趣味にかえり、単純で自然なスタイルを回復するまでに、なんと多くの世紀が流れ去ったことだろう！」

17

「一つの思想を表現するさまざまな異った表現のなかで、的確な表現はただ一つしかない。そして、話す時にも、書く時にも、このただ一つの表現に出会うことはめったにない。しかし、こういう表現が存在することはたしかである。そこから外れている表現はすべて弱く、自分を理解させようとするすぐれた精神を満足させることはできない、ということもたしかである。」

注意深いすぐれた作家は、ながい間見つからずに捜し求めていた表現がついに見つかった時、それがもっとも単純で、もっとも自然な、最初からなんの苦もなく見つかるべきものであったことを、しばしば感じる。

気分でものを書く人は、作品をたやすく修正したがる。気分は定着しないもので、情況によって変るため、作者は

自分がもつとも愛着した表現や言葉に対して間もなく冷却するのである。」

この章句はそのままフローベールを思わせるが、ラ・ブリュイエールはここで初めて、*un homme d'esprit* なる言葉を使っている。的を外れた表現は *un homme d'esprit* を満足させることができないという場合のエスプリ (*esprit*) は、作者であるためにはエスプリ以上のものが必要である、という2の章句のエスプリではなく、むしろ、すでに作者たり得るすぐれた資格としての精神である。そしてこのようなエスプリだけが単純にして自然な表現を見つげることが出来る。趣味は判断の質を決定するものであるが、気分は判断を欺く誘惑者にすぎない、と、ラ・ブリュイエールは言っているようである。

18

「われわれに、よい表現を捜し出してくれる精神の正しさは、なおかつ、その表現が人に読まれるに価するかどうかを憂うるものである。」

低俗な精神は神がかった書きぶりをする。すぐれた精神は理にかなって書くことだけを考える。」

序文の「理をわきまえた人間」が、ここではそのまま文学に置きかえられている。したがって、理をわきまえた常識人は、理にかなって書くことのできる作者と同様、選ばれたる少数者である。正常という観念は、ラ・ブリュイエールの場合、このように解釈さるべきものと思う。そしてこの観念はまた、そのまま作者から読者の立場に移ることが出来るものである。

35

「バカ者が一冊の書物を読む。彼は完全に理解しない。凡俗の徒は完全に理解したと思う。すぐれた精神の人は、時として、完全には理解しないことがある。彼は、不明なものは不明であると思ひ、明瞭なものは明瞭なものとして

見る。気取った男は、少しも不明ではないものを不明であると言い、まったく明瞭なものを、理解に苦しむなどと言いたがる。」

36

「作者が自分の作品を通して人に崇拜されようとつとめたりするのは、無駄なことである。バカ者は崇拜することもあるが、要するにバカ者である。すぐれた精神の人は自己の内部にあらゆる真理と感情の種子を内抱しているで、彼らにとって新奇なものはない。彼らはめったに崇拜しない。彼らは納得するのである。」

すぐれた人は崇拜せずに判断する。それは承認であり、評価である。しかし、芸術の全体的な感動は判断の上にあることをラ・ブリュイエールは知っている。55の章句の一節がそれである。

55

「雄弁は対話のなかに、また、あらゆる種類の文章のなかにある。雄弁は、それを捜す場所にはめったにない。むしろ、しばしば、少しも求めようとしない所にあるものである。」

そして、ラ・ブリュイエールは、この雄弁の構成要素を *sublime* という言葉で現わしている。*Sublime* は真実しか描かないものであるが、その真実にもっともふさわしい表現、もしくは描写でなければならぬ。凡庸な精神は唯一固有 (*unique*) の表現を知らないで、同義語 (*synonymes*) を使う、と言っている。同義語は、雄弁の無用な助力者である身振や声や調子にすぎないものであるが、*sublime* は、むしろ表現の品格であろう。

「雄弁と表現の品格は、全体と部分との関係である。」

57

「軽薄稚拙、そして、通俗愚劣でもある書物の内容が理解しやすいからといって、また、このような作品に腹も立

てず、この作者の思想は平易であるなどと考えることが、読者にとって何の役に立つだろうか？」

単純自然な文体を説くラ・ブリュイエールの精神の的は、通俗一般の上に、遙かに高く置かれているのである。

× ×

判断もしくは認識としての常識は、その高さや純粹性から生ずる現実の拒否や否定のために、一つの異質的な精神のように見える。しかしラ・ブリュイエールは、デカルト風に「だれにも通じる筋道をたどり」ながら、常識の高い特権的な身振りを自ら厳しく用心する。テオフラストに関する序文のなかで彼が自作について語る言葉はこのような意味で解釈されなければなるまい。常識が現実的であるということは、常識が現実により自己の一部を売渡したり、現実との同化作用を承認するからではなく、むしろ、自己の完全な承認としてその鏡を現実に与え、現実の姿が一層明かに見えるようにしていることであろう。これが常識の批評である。そして、批評の鏡が明瞭であるためには、批評の自由と、自由を可能にする条件が必要となる。その必要条件は、精神の独立と無名性(anonymat)である。ジュリアン・バンダはラ・ブリュイエールの人間批評について次のように述べている。

「ラ・ブリュイエールは人間の本性について完全な先入観念を持っている。それは彼の作品の背後に立てられた一つの哲学であって、作品のすべてがその色に塗られているものである。そしてその哲学は、彼の時代の哲学、即ち、キリスト教徒の哲学、ニコルやボシュエやパスカルの哲学である。人間の本質は悪であり、思籠にあずからないその本質は墮落と邪惡にすぎず、と考える哲学である。自由な目が当然認めざるを得ない人間の善意をほとんど全面的に否定するラ・ブリュイエールの思想はこの哲学から生れている。」(Introduction)

たとえラ・ブリュイエールの思想の背景にキリスト教的な形而上学と信仰がはたらいていたとしても、自分の作品がパスカリや、ラ・ロシュフコオとは、まったく異った意図と精神で書かれているという作者自身の宣言は、この宣

言に忠実であると思われる作品の章句を通じて割引なしに受け容れらるべきものと思う。割引さるべきものはモンテ
ーニユの場合ほどでないにしても、むしろ作者のキリスト教であろう。作者のキリスト教的精神を証明する最後の章
「強き精神」がこの作品から除かれたとしても、作品の存在理由は少しも損われぬからである。パスカルの批評精
神からキリスト教の信仰を抜き去ることとは、本質的な違いがある。一つの自由な批評精神が現実の諸悪を明かに写
し出すのは、影の存在を教える光の機能であり、それが批評の役割と目的でもある。ラ・ブリュイエールの社会批
評がしばしば貧しい庶民の側に立つことと、庶民出身のラ・ブリュイエール自身が社会的特権を持たなかったこと
を、どのように符合さすべきか、早計な推論は慎まなければならぬが、そこには明かに、批評精神の独立と無名
性に共通する当然な筋道がある。第二章「個人の価値」は、この批評の出発点のように思われる。

「個人の価値」

20

「稀なものには強く心を動かすが一般の人情であるのに、なぜ人々は美德というものにそれほど感動しないのだ
ろう?」

この章句は、ラ・ロッシュフコオのように、美德そのものの否定を暗示しているとは思われない。人が美德に感動し
ないのではなく、むしろ美德の本質は、それほど人の目に映らないものである。美德は無名の性質の上に、極めて常
識的に立っているからである。美德に感動することは、美德以上に稀なことかもしれないのである。

21

「名門の出生が幸福であるならば、出生のことなど、だれもたずねようとさえしてくれないことも、幸福である。」

この章句の前半は、無名の出生を語るための対句の意味しか持っていない。出生の無名と美德の無名性が同じ次元の同一線上に置かれている。

22

「この地上には、時たま、美德に輝き、その抜群の天質をもって燦然たる光芒を投げかける高雅な、稀有な人間が現れる。出現の原因も不明であり、消え去った後の成行きもわからない星のように、彼らは先祖も子孫も持つてはいない。彼らは彼ら自身だけの種族を構成しているのである。」

22と21の章句は第四版に補充され、22のこの章句は第五版に追加されたものである。慎しい稀な美德が、ここでは突如として、強烈な孤独の光を放っている。社会通念としての美德の意味は、ほとんど失われているようである。このような孤独の美德さえも、なお美德 (*vertu*) と呼ばれ得るものだろうか。もし美德 (*vertu*) の意味が自己存立の精神として、芸術家、詩人、科学者、たとえば、ガリレオ、ダヴィンチ、ボードレルにまで通じる美德であるならば、強烈な美德の光芒も容易に理解される。しかしラ・ブリュイエールは、この孤独な美德の所有者たちを “*des hommes rares, exquis*” と呼んでいる。先覚者や開拓者の前衛的、確信的な要素はどこにもない。世俗の上に高く慧星のごとく現れ去って、なおかつ高雅な精神というものは、おそらく古典時代の最高の趣味、正に *sublime* なるものであるか。

23

「すぐれた精神は、われわれに、われわれ自身の義務と、その義務を果すべきことを教える。もしそこに危険が存在するならば、危険をもって果すことを。このように勇気をわれわれに与えたり、助長してくれるものなのである。」
義務とは何を指しているのか、またそれは、ラ・ブリュイエールの精神体系にどのように関連しているか、という

興味を除けば、この章句は文体のない、教訓的な抽象語の配列にすぎない。美德 (*vertu*) を義務の自覚とすれば、個人の価値 (*merite*) は義務を果す美德の外にはない。それは、社会的な実利や効用との相對關係から區別された、自己 (*soi*) にだけかかわる *désintéressement* の世界であろう。つまり自己は、他人や社会に対してではなく、自己が自己の上に加える重みとしてのみ存在する。(13 参照)

25

「一人の女性も持たない自由な男は、いくらかの精神的資質に恵れてさえいれば、与えられた地位以上に高く上り、社交界に交わり、もっとも高潔な人々と轡を並べることもできる。しかしこのことは、結婚した人にとってはそれほど容易なことではない。結婚はすべての人を、その秩序のなかに納めてしまうようである。」

43

「賢人は野心によって野心から脱け出る。彼は余り大きな問題に心を向けているので、人々が財宝、立身出世、寵愛などと呼んでいるものに心を限ることができない。彼はこのようにはかないものに、自分の心を満たし、また、自分の欲望や心労に価するほどすぐれた確たるものを見出すことができないのである。しかも彼は、それらのものを余り軽蔑しすぎないようにさえ努めている。賢者を誘惑する唯一のものは、純粹單純な美德から生れる一種の名誉であるが、それさえも世間はほとんど与えようとはしない。そして賢者は、このような名誉も知らずに過すのである。」

なお、ラ・ブリュイエールは12の章句のなかで、「賢者の閑暇というものは、そのような状態を呼ぶのに、もつとふさわしい名称だけが欠けている。つまり、瞑想し、語り、読み、静かにしていることが勉強と呼ばれるような名称が。」と言っている。

結婚と自由人、職業と賢者は、それぞれ異った秩序に属し、相互に拒否し合いながら対立しているように見えるが

もし現実がこのような矛盾と抵抗の力学関係に終るものとすれば、ラ・ブリュイエールの美德 (vertu) の観念は崩壊する。一つの美德は他方において本質的に悪徳でなければならぬからである。したがって、美德が美德であり、自由が美德であるためには、これらの対立が一つの全体に融合し、服従していなければならぬ。美德とは、人間と社会を貫く共通の筋道によって一つの全体を想定することではあるまいか。自由人の自由は結婚に対し、賢者の美德は現実社会に対して *negatif* であるが、全体の観念の中では *positif* である。美德が、それ自ら足りる無償の精神であるにしても、それは、この全体へ奉仕する立て前からそうなのである。そして、全体への奉仕は、ラ・ブリュイエールの場合、神への奉仕ということになる。全体は普遍性の別名にすぎないものだからである。このようにして批評が批評たり得たのであって、批評と自由と美德とが一つの精神として融合調和することを許していたものが古典精神と呼ばれるのであろう。 *negatif* の美德は近代ロマン主義の出現を待たなければならぬ。

エミール・アンリオは、「十七世紀文学通信」の「古典とは何ぞや」の章のなかで「古典の作家たちはいずれも道徳的であることを誇っていたが、しかしそのために芸術を損うほどではなかった。先ず芸術、次に道徳、それも、できれば付け足しに、というほどのものだった。ラシーヌが *リフェードル* を書いたのも、当時の人々に道徳を説くためではなく、感動させるためであった。」

(Emile Henrio, *Courrier littéraire*, XVII^e siècle)

道徳 (morale) は、この場合、徳 (vertu) と区別されなければならないだろう。vertu を morale の本質 (essence) もしくは原理 (principe) とすれば、morale は vertu の現実的効用を意味する。人を感動させるのは芸術及び芸術家の vertu であって、道徳的効果によるものではない。問題は、道徳を掲げ説くことではなく、ラ・ブリュイエールの場合と同様、古典作家の精神のなかで vertu の観念が、自己を現実との対立を通して完全であり得たことである。古

典における全体とはこのことであり、さらにこの全体を蔽うものとしてキリスト教があるのは当然であろう。しかしその理由から、作家や作品の最重要な支柱がキリスト教であると考えるのは、真実の的外れることになる。作家はキリスト教徒であると同時に、より多く作家だからである。ラ・ブリュイエールからキリスト教を割引くことによつて、どれほど彼の作品の真価が傷つき減ずるだろうか？

「社交について」

「作家の全精神は、よく定義し、よく描くことにある」という文学精神は現代にも通じるものであるが、そこには、単純普遍の真実を最高の規範とする古典の性格があきらかに示されている。しかし、ラ・ブリュイエールの近代性は、このような古典の性格や趣味から離れ、人間の些細な、特殊な事実を捕える繊細な感受性や洞察力のなかに閃いている。それは、全体に対応する部分としてよりも、部分が部分として十分に独立した意味を持っている場合である。

41

「社交の場では、先ず理性が最切に頭を下げる。もっとも賢明な人々も、しばしば、もっとも狂気じみた、もっとも奇異な人物にひきずられる場合がある。人々は、こういう人物の弱点や気分や気紛れを心意で調子を合わせる。さからわないように努め、誰も彼も譲歩する。ちよつとした明るい晴れ間が顔に現れても、それが人々の称賛を呼ぶ。必ずしも我慢のできない人ではない、と人々は考えるのである。彼は恐怖され、うまくあしらわれ、服従され、時には愛されもするのである。」

時には愛される狂気じみた異常な人物は、ドストイェフスキーやプルーストの作品に現れる怪しげな世界であるが

「社交について」の章のなかには、小説のテーマを記録したようなものがある。

43

「クレアントはたいへん高潔な人物だった。彼は、もっとも常識のある、申し分のない婦人と結婚した。この二人は、いたるところ社交界の歓待の的となった。この二人ほど謙虚で礼儀正しい人物は他になかった。ところが、彼らはすでに離婚することになり、公証人の手許には離婚の手続きまで揃っていた。思うに、人間の性質には、どうしようとも一つに結ばれることのできない長所や、両立することのできない美点というようなものがあるらしい。」

これは、人間の絶望とも救済とも関係を待たない事実と真実の世界である。ラ・ブリュイエールのなかにすでに近代の散文作家が住んでいたようである。

49

「わたしは小さな街に近づく、そして、わたしはもう、すっかり街が見える高いところまで来ている。街は丘の中腹にあって、一条の川が外壁に沿い、やがて美しい牧場を流れてゆく。黒々とした厚い森が、寒風や北風から街を守っている。晴れ渡った空の下に、いくつかの塔や鐘楼まで数えることができる。街は丘の斜面にまったく小さい。私は感嘆の叫びをあげる。ああ、この美しい空の下に、この閑雅な土地に住むことができたら！、と思う。わたしは街へ降りてゆく、そして、二晩も過ぎないうちに、この街の人たちに似てくる。わたしはもう街から逃げ出したいと思うのである。」

プルーストを読んだ人は、「失われし時を求めて」のある頁を読み返しているのではないかと疑うだろう。またプ
ルーストがこの章句をどんなふうにしたかを考えるだろう。

「人は書くよりも、もっと機微に (*finement*) 話すことができるのではあるまいか。」

ジュリアン・バンダはこの章句をとりあげ「構成された思想によっては到達することのできない現実の限りない複雑さを語る近代的な言葉として、この短い章句に優るものがあるだろうか。」と、序論 (*Périade*) に述べている。しかし彼は、この同じ章 (*De la société*) のなかで、ラ・ブリュイエールが会話の浮薄性について厳しく抗議していることを注意している。おそらくそれは、12から23に続く章句を指しているのだろう。17の章句では、「われわれは、話す時にも、書く時にも、余り多く想像力を用いてはいけない。想像力は、しばしば、空疎な思想しか生まない。また、われわれの趣味を高め、われわれ自身をよりよくすることに少しも役立たない。われわれの思想は良識と素直な理性から汲みとられ、判断の結果としてあるものだ。」と言っている。気分にかかせてものを書くなどという「作品について」の17とともに、ラ・ブリュイエールの一貫した古典精神である。単純明晰は、書くことと話すことに共通した原則であって、書くことよりも話すことのなかに一層すぐれた別種の機能を認める見解は、この78の短章にはじめて現れている。しかも、単純明晰の精神とはまったく異質のはたらきとして示されている。これは、ジュリアン・バンダが指摘しているように、単純な表現、明瞭な像や論理、構成された思想から逃げ去る複雑微妙な現実は、書くよりも話すことによって一層よく捕えられる、という意味であろう。43のクレアントとその妻のように、両立しがたい美点 (*vertu*) の承認である。ラ・ブリュイエールの近代性はこのように公平な視野の回転に発しているのではあるまいか。公平が、時には、冷静と残酷に通じているとしても、真に *humain* であり得る場所はそこにしかないであろう。これがラ・ブリュイエールの卓抜した常識の世界である。

「人間について」

47

「人生は睡眠に似ている。老人は、他の人より眠りの長かった人たちである。彼らは死に臨んで、はじめて目を覚ます。そこで、過ぎし年月のすべてを思いおこしてみるのだが、とりわけ美德とか善行とか呼ばれるほどのものは、まづ、ほとんど見当らない。年令の区切りもぼんやりしてしまって、自分の生きてきた時間を測るのに、これという目印もない。なにか漠然とした、形のない、つながりもない一つの想念があったというだけである。しかし老人たちは眠りから目覚める人のように、長く眠ったと思うのだ。」

ブルーストとヴァレリイを同時に思わせる不思議な章句である。死の鞭を借りずに目を覚めているのは、少数の詩人が賢者か。

63

「党派心は、もっともすぐれた人たちをさえ、民衆の卑小なレヴェルまでひきおろす。」

この章句には、社会の現実から脱しようとする精神それ自体の独立と自由の兆候が見える。そして、民衆の側に立つ幾つかの他の章句にもかかわらず、民衆の実体から目を外らさないラ・ブリュイエールのもっとも重要な章句の一つである。公平とは、リアリズムの別の言葉であり、目を覚めている精神のことであろう。

132

「哲学者という言葉に驚いたり、顔を赤らめたりする必要はない。哲学の気を帯びていない人は誰もいないのだから。哲学は誰にでも適するもので、その実践は、男女の別を問わず、いかなる身分の人にも有益である。哲学は、他

人の幸福や不公平や不当な出世や、また、われわれ自身の体力や美の衰えから、われわれを慰めてくれる。哲学はさらに、貧困、老年、病気、死などに対し、また、バカ者や意地悪い誹謗者に対して、われわれに武器を与えてくれる。またさらに哲学は、一人の女性も持たずに暮すことを、あるいは、一人の女性と我慢して暮すことを、われわれに教えてくれる。」

この章句の最後は、おそらく、皮肉の微笑を浮べながら書いたものであろう。しかしラ・ブリュイエールのプラグマチズムは、次の章句が一層明瞭にその原理を語っている。

133

「人の心は、おなじ一日の間に、いくつかの小さな喜びに開かれ、悲しみに支配される。わずかな時間の間に人の心や精神のなかに起るものほど、まぢまちで不条理なものはない。このような不幸を救う手段は、価値のあるものだけを、正しくその価値のゆえに尊敬することだけである。」

ラ・ブリュイエールは、不条理の救済を、パスカルのように、宗教の方へ向けようとはしていない。前章132の哲学という言葉が、キリスト教的な意味合を含んでいないことはいうまでもない。

155

「ティモンという人間嫌いの男は、厳格で粗暴な性質らしいが、外見はいたって礼儀作法をわきまえ、丁重である。彼は人を避けたりはしないが、人に馴れ親しむことはしない。人を紳士的に、真面目にさえとり扱うのだが、むしろそれは、人の親しみを遠ざけるためにあらゆる手段を用いるということなのである。彼は人をもっとよく識って友達にしようなどとは考えない。それはちようど、ある婦人の宅を訪ねている一人の女性に似ている。」

Vertu を説き、モイゼやホーマーの文体を指示して古典精神を説くラ・ブリュイエールのなかに住む、これは近代のリアリスト作家ラ・ブリュイエールである。ジュール・ルナールがポケットにしよばせているラ・ブリュイエールであろう。127と128の章句では、やや宣言的な調子をおびているが、リアリストの目に映り、その精神が訴える叫びであるだけにこれらの宣言は一層強い印象を与える。127では「土地の押収、家具の差押え、牢獄や拷問も必要であろう。しかし、裁判、法律、その他の必要は別としても、人間がどのような残酷さで他の人間を取り扱っているかという事実は、わたしにとって、つねに注意を呼び醒す問題である。」そして128では、「原野に散らばっている、何か得体の知れぬ雌雄の野獣、蒼黒く日に焼け、地面にへばりついて、執拗に土を掘り動かしている。声は、はっきりしている。立ちあがると、人間のような顔をしている。事実、彼らは人間なのである。彼らは夜になると穴に帰り、黒ペンと水と草の根を食べて生きている。彼らはこうして、他の人間に生きるための種蒔や耕作や収穫の労をはぶき、そして、どうやら、彼らが蒔いたこのパンにありついでいるのである。」

ラ・ブリュイエールの、このような描写と表現は、たしかに、人類の思想史のなかで見逃すことのできない重要な意味を持っている。しかし、革新的な社会思想の先駆者としてこの種の章句を取りあげることが妥当であるかどうかジュリアン・バンダは次のように解釈している。

「政治思想家としてのラ・ブリュイエールが描いた歴史の曲り角は、彼が当時の社会について発言したことよりもむしろ、社会を語る持続的な意志、そしてそれを思索の糧としていたことにある。カレ・キャラクターIIの著者は断じて革命家の先駆者ではなく、彼の半世後に開花した思想界、それは、既伐の社会秩序の変革を決意したのではなく、そのような問題をフランス人の会話や好奇心や論議の習慣として創り出したことにより、ついにその変革をもたらした、そのような思想界の先駆者ラ・ブリュイエールではないかと思う。」

「判 断」

世俗への挑戦と精神の擁護は、この章のなかでもっとも激しい語調に変わっている。版を重ねる度に補足される章句があきらかにこの推移を語っている。

66

「人々はソクラテスの精神が錯乱したと言った。ソクラテスは優秀な精神を持った狂人であると言った。しかし、ソクラテスのような賢人をこのように批評したギリシヤ人の精神こそ間違いだったのである。彼らは言った「この哲学者はなんとという奇怪な肖像を描くのだろう！ なんとという不思議な風変わりな人間を描くのだろう！ こんな桁外れの着想をどこから掘り集めてきたのだろう！ この色彩、この画法は何だろう！ みんな怪物ではないか。」彼らは間違っていた。ソクラテスが描いたものは正に怪物であり、畸形であったが、しかしそれは、真実を描いたにすぎなかったのである。彼は偽善者の理屈屋どもと訣別し、人間を尊敬したのだった。彼は腐敗した人間の性情を非難したまでである。」（第四版）

20

「私がウリピルの名をあげると、彼は立派な精神だ」と君は言う。しかし君は同じように、家の桁を造っている男のことを「彼は大工だ」と言う。石屏を直している男を「彼は石屋だ」と言う。そこで私は君に質問するが、立派な精神とかいう人はどんな仕事部屋を持っているのか？ どんな看板をかけているのか？ その立派な精神屋はどんな服装で見分けがつくのか？ 彼の道具は何か？ 楔か、槌か、鉄床か？ 精神屋はどこで自分の仕事に穴をあけたり叩いたりするのか？ その仕事をどここの売場へ並べるのか？ 職人は自分を職人だといって自慢するだろうか、ウ

リピルは、自分の立派な精神を自慢するだろうか？ もしそうだとすれば、美や精神とは何のかわりもない汚れた機械人形、精神的俗物であろう。……」(第六版)

105

「自由とは、気紛れの自由ではない。自由は、時間の自由な使用であって、それは仕事と実践の選択である。自由は、無為の自由ではなく、為すか、為さざるかの唯一の決定者である。この意味においてこそ、善きかな、自由よ！」(第七版)